

Title	翻訳不可能な意味は可能か—応答の倫理と制度の限界を超えて
Author(s)	石橋, 哲
Citation	年次学術大会講演要旨集, 40: 395-398
Issue Date	2025-11-08
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	https://hdl.handle.net/10119/20243
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

1 E 2 1

翻訳不可能な意味は可能か—応答の倫理と制度の限界を超えて

○石橋哲（株式会社クロト・パートナーズ sa.ishibashi@klothopartners.com）

1. 序論：問題提起と核心的問い

1.1 現代的パラドックスと「聞くことの不可能性」の構造

- 現代社会は、「発信力信仰」や「語ることの強制」の上に成り立っており、真に聞かれるべき声が「沈黙」していくという逆説に直面している。この構造的問題は、制度が回収を予定する「翻訳可能な意味」（R-Meaning）の過剰生産と、「翻訳不可能な意味」（U-Meaning）の構造的排除に起因する。
- R-Meaning によって構築される制度的語り、形式的信頼の再生産と応答責任の回避設計として機能する「免責装置」となる。この「語りの滑らかさ」は、制度側に「聞くことの不可能性」を生み出す。これは、U-Meaning（沈黙、問いの厚み、非言語的表現）を真に聞き、正当化する能力と意思が構造的に欠如した状態を指す。U-Meaning の排除は「ザルの構造」として機能し、創造性やレジリエンスといった「末語の価値」を組織と社会から継続的に損失させている。
- 本稿は翻訳不可能な意味（U-Meaning）の重要性を明示し、応答責任の制度的強制を可能にする理論的設計を提示する。

1.2 核心的問いと応答責任の論理的必然性

- 本研究は、この U-Meaning の回収不可能性がもたらす倫理的危機に対し、以下の根源的な問いを立てる。

核心的問い（タイトル）：「翻訳不可能な意味は可能か」

（U-Meaning の存在論的不可避性を前提としたとき、
それを回収しうる制度的応答の倫理的行為は可能か？）

- この問いへの応答の道筋は、論理的な必然性によって橋渡しされる。U-Meaning が H1（存在論的価値）において、AI の記号論的处理を拒絶する「非計算性の領域」として不可避的に存在すると証明されるならば、制度は E. レヴィナスの提唱する「他者への無限の責任」を負わざるを得ない。
- したがって、本研究が提案する「問いの杭」最小実装プロトコル（H2）は、U-Meaning を観測する技術ではなく、この無限の責任を組織内で有限の行為として具現化させ、強制的に実行させる唯一の方法であると位置づけられる。

1.3 研究デザインと主要仮説（H1, H2, H3）

- 本研究は、以下のリサーチクエスト（RQ）と主要仮説に基づき、論証を展開する。

➤ リサーチクエスト（RQ）：

制度から排除された U-Meaning は、いかにして具体的な介入プロトコルを通じて制度構造に埋め込まれ、従来の「聞くことの不可能性」を克服することで、組織の倫理的応答責任を強制的に履行させる実証可能な価値へと変換できるか？

- ✧ 主要仮説 H1（存在論的価値）：人の本質的価値は、AI による記号論的处理を根本的に拒絶する前言語的な“翻訳不可能な意味”に宿る。
- ✧ 主要仮説 H2（応答責任の強制履行）：翻訳不可能性を「杭」として制度構造に意図的に挿入する最小実装プロトコルは、応答の倫理を制度に強制的に演じさせることで、組織の倫理的応答性を拡張する。
- ✧ 主要仮説 H3（倫理的防御の最終ライン）：「愛」は、U-Meaning の非形式性を保護するシステム不可侵原理（SIP）として機能し、再形式化の暴力を防ぐ。

II. 理論的基盤：存在論的価値（H1）と応答の倫理（H3）

- 本稿は U-Meaning の存在論的不可避性を踏まえた理論的設計を提示する。

2.1 U-Meaning の存在論的防御と「非計算性の肯定」（H1）

- H1 は、U-Meaning を AI による「意味の支配」構造¹への根源的な抵抗として定義する。U-Meaning は、身体感覚、非表象感情、暗黙知など、AI の記号論的处理を根本的に拒絶する「非計算性の領域」であり、言葉や概念が届かない「間隙（aporia）」を開示する。
 - ◇ 哲学的防御：この不可避な存在は、G. C. スピヴァクの「認識論的暴力」や G. アガンベンの「ホモ・サケル」が示す、制度による抹消のメカニズムを批判するための土台となる。

2.2 応答の倫理：H3 とシステム不可侵原理（SIP）の機能

- H3 は、U-Meaning の非形式性を制度的に保護するための運用原理であり、レヴィナスの「無限の責任」を制度設計に接続する。
 - ◇ 〈恥〉の触媒機能：応答回路を再構築する触媒は、J. ハーマンが指摘する「語り損ね」の重みに気づく〈恥〉の感受性である。杭プロトコルは、この〈恥〉の感受性を制度に再起動させることを目的とする。
 - ◇ 再形式化の回避：H3（愛）は、単なる測定不能な理念ではなく、倫理的防御の最終ラインとしてシステム不可侵原理（SIP）という能動的な防衛メカニズムとして機能する。これは、J. バトラーの「脆弱性の政治」の承認に基づき、翻訳不可能なものが共存しうる「問いの余白」を制度的に設定するための戦略である。

III. 杭プロトコル設計：最小実装と複合検証モデル（H2 の検証）

- H2 の検証は、杭プロトコルを介入・観測・指標に基づいた最小実装プロトコルとして操作定義することで行う。杭は、制度に残す「未完の欄外」であり、過剰な整合性に意図的な倫理的振動を注入する装置である。

3.1 「問いの杭」最小実装プロトコル：沈黙の強制挿入

項目	操作定義	目的と杭の機能
介入フェーズ	会議や意思決定プロセスにおいて、議論の主要な争点の後、意図的に2分間の沈黙時間を設ける。	非計算性の強制：AIによる最適化ロジックの停止。沈黙を「語らない選択」として肯定し、問いの熟成を促す。
杭の記録	沈黙によって生じた決定保留および語られなかった問いの痕跡を、「空白報告書」として制度ログに記録する。	制度の認知枠や感性レイヤーへの“倫理的ビン留め”として機能させる。

3.2 複合検証モデルと「抗意味性スケール」の妥当性強化

- 沈黙が単なる官僚的な先延ばし（R-Silence）ではなく、倫理的熟慮の結果であることを検証するため、定量指標と定性的指標を連動させる複合検証モデル（抗意味性スケール）を導入する。

指標名	内容定義	観測単位と操作手順（妥当性検証の強化）
保留率（Hold Rate）	U-Meaningによる揺らぎを許容し、決定を保留した割合（定量的指標）。	妥当性検証：この保留が次項の主体性転換スコアと正の相関を持つ場合にのみ、「倫理的保留」と見なす。
主体性転換スコア（Subjective Shift Score）	沈黙介入前後で、議論の主語が「制度（我々）」から「個人（私）」へと転換し、感情価が増加した度合い（定性的指標）。	操作手順：感情語（J. ハーマンの「語り損ね」に関連する類型）の出現頻度と、主語の類型化を複合測定し、倫理的熟慮の発生を間接的に証明する。
再参照率（Re-reference Rate）	後日、沈黙中に浮上した問い（杭）が再び議論の俎上に上がった割合。	機能：杭が恒久的な倫理的振動子として機能し続けていることの証明となる。

3.3 実証ログ：南相馬市ワークショップ実践の概念検証

- 南相馬市 WS の事例（石橋（2025b））は、杭プロトコルの原理的有効性を示す概念検証としての適用ログとして利用される。
 - ◇ 問題構造：福島浜通りで、制度に適合する語りだけが支援対象となり、語られない痛みや問いが排除された「聞くことの不可能性」の構造。

- ✧ **介入（ログ）**：参加者が制度的言説と身体的記憶の乖離を感じる「語られぬ空間」に、物理的な「石」や「杭」を置く行為。これは、本プロトコルの沈黙がもたらすアナログな攪乱と原理的に等しい。
- ✧ **成果（ログ）**：杭の挿入は、硬直化した制度語りに亀裂を入れ、後の政策再検討のきっかけとなり、応答責任の強制履行を促す有効な実証ログとして機能した。

3.4 現時点の論証結果：構造的論証と H2 の検証達成の定義

- 本研究は、H1 と H3 に基づく倫理的設計論の提案段階にあるため、論証結果は以下の構造的論証によって提示される。
 - 論証結果の現況：複合検証モデル（抗意味性スケール）を用いた定量的な実証実験は次段階の課題である。現時点の論証結果は、南相馬 WS のログ分析を通じて、「問いの杭」が硬直化した制度構造（R-Meaning）に亀裂を入れるという H2 の原理的有効性と概念的妥当性を示したことにある。
 - H2 検証達成の定義：主要仮説 H2（応答責任の強制履行）の検証達成は、U-Meaning の観測ではなく、杭プロトコル適用によって制度が回避・抹消していた倫理的行為を「履行せざるを得ない」状況（すなわち、保留率の上昇と主体性転換スコアとの正の相関）が観測された時点をもって定義される。これは、制度の応答構造に倫理的負債を可視化するメカニズムが機能したことを意味する。

IV. 倫理的配慮とリスクマネジメント

- 本研究で提案する杭プロトコルは、沈黙やトラウマ、証言不可能性といったセンシティブな領域を扱うため、以下のリスク管理を前提とする。

4.1 二次被害の防止と沈黙の尊重

- ✧ **語りの非強要**：介入の目的は U-Meaning を抽出することではなく、**応答責任を強制的に演じさせる**ことにある。そのため、参加者の語りを強要せず、沈黙そのものを「応答の一つの形」として尊重する。
- ✧ **倫理的防御の明記**：H3（SIP）の非追放の原理（杭によって生じた曖昧さをシステムから決して追放しない）をもって、トラウマ的経験が AI によるシミュラクラ化¹や二次被害に繋がることを防ぐ。

4.2 記録管理と形式化の危険の回避

- ✧ **記録管理と再同意**：杭のログ化、特に「空白報告書」や質的記録（主体性転換スコア）は、個人特定を避けるために匿名化を徹底する。介入後も当事者の同意を再確認し、杭が予期せぬ負担にならないよう配慮する（再同意の確保）。
- ✧ **形式化の危険への対処**：杭プロトコルが制度に吸収され、「新たな語りの強制」とならぬよう、杭は常に「問いの厚み」が宿る「未完の欄外」として運用することを SIP の不可欠なルールとする。

V. 結論と展望

5.1 結論の統合と問いへの応答

- 本研究は、「翻訳不可能な意味は可能か」という問いに対し、U-Meaning の存在論的不可避性（H1）を論証し、その応答責任を制度に強制的に履行させる「問いの杭」最小実装プロトコル（H2）を提示した。
- H2 は、沈黙の強制挿入を介入とし、保留率、主体性転換スコア、再参照率という複合指標を用いることで、「倫理的な熟慮」を実証的に捉え、従来の「聞くことの不能性」を克服する。この設計は、AI による意味の最適化圧力に対し、非計算性の肯定をもって対抗する技術的抵抗の論理を内包する¹。

5.2 倫理的パラダイムシフトへの戦略的展望

- 本研究の提言は、抽象的な理念に留まらず、社会の倫理的基盤と応答構造を具体的に再構築する戦略的なパラダイムシフトである。
 - ☆ **政策実装**： 行政の住民対話プロトコルに沈黙介入を義務付け、住民の潜在的な「語らない声」を政策立案に反映させる（例：行政対話における空白報告書の制度化）。
 - ☆ **教育実践**： 内田樹が提唱する**「問いを発芽させる力」を中心に据え、形式化された R-Meaning しか学習しない生成 AI 時代に対応するため、「語る力」よりも「問いの深み」を評価するカリキュラム設計を促す。
 - ☆ **AI ガバナンス**： 技術ガイドラインに、H3（SIP）に基づく倫理的失敗時の強制監査ループを組み込み、AI による責任主体回避設計を構造的に阻止する。
- この倫理的基盤の転換こそが、金銭的な評価軸だけでは測れない多様な価値が花開く新たな「沈黙の経済圏」を構築し、社会を真の共生へと導く道筋となる。

VI. 用語集 (Glossary)

用語	定義
問いの杭（杭）	U-Meaningの存在を前提とし、応答の倫理を制度に強制的に演じさせるための最小実装プロトコル。制度に残す「未完の欄外」であり、倫理的振動子として機能する。
翻訳不可能な意味 (U-Meaning)	制度の形式的枠組みによって構造的に排除される、沈黙、問いの厚み、語り損ねた経験など、AIの記号論的处理を拒絶する非計算性の領域。
抗意味性スケール	制度の効率性ではなく、その倫理的包摂能力を評価する指標群。「保留率」「主体性転換スコア」「再参照率」の複合検証モデルに操作定義される。
システム不可侵原理 (SIP)	倫理的防御の最終ラインとしてH3（愛）を機能させる能動的なメカニズム。杭が無視された際に倫理的失敗に焦点を当てた強制監査ループを起動する。
主体性転換スコア	沈黙介入前後での、議論の主語が制度的主語から個人的主語へ転換し、感情価が増加した度合いを示す定性的指標。倫理的保留の妥当性を検証するために用いられる

謝辞

- 「愛は AI を超える」は福島県南相馬市にお住いの江本節子氏の提唱によるものである。ここに記し、深い謝意と敬意を表する。

参考文献

1. アガンベン, G. (2003). 『ホモ・サケル：主権権力と剥き出しの生』 以文社.
2. オースティン, J. L. (1978). 『言語と行為』 大修館書店.
3. インゴルド, T. (2021). 『ラインズ 線の文化史』 左右社.
4. 国会東京電力福島原子力発電所事故調査委員会. (2012). 『国会事故調報告書』.
5. スピヴァック, G. C. (1998). 『サバルタンは語ることができるか』 みすず書房.
6. ハーバーマス, J. (1976). 『公共性の構造転換：市民社会の一カテゴリーについての探究』 細谷貞雄訳, 未来社.
7. ハーマン, J. L. (1999). 『心的外傷と回復』 みすず書房.
8. レヴィナス, E. (2005). 『全体性と無限：外部性についての試論』 講談社学術文庫.
9. 石橋哲 (2025a)「語られぬ空間の倫理：福島浜通りにおける「聞くことの不可能性」の構造と介入の視座」、(2025b)「〈語られなさ〉の制度的包摂の試み—南相馬市ワークショップ実践における倫理的デザイン」日本災害復興学会 2025 年度大会予稿論文
10. 石橋哲 (2025c). 「沈黙を破る応答設計：生成 AI と原子力体制における「聞くことの不可能性」への介入」 (2025d). 「語られぬ問いは杭となる—形式化された報告への倫理と制度の余白」、(2025e). 「問いの杭」—沈黙を応答性の装置に変え、倫理とイノベーションを架橋する」研究イノベーション学会 予稿.